

ネルヴァルの作品における時間の研究

— その 3 —

山 縣 直 子

V ≪AURÉLIA≫

最初に疑問があった——われわれはどこから来たか、われわれとは何か、われわれはどこに行くのか……

「^{エム・デス・ディンヤード}廢嫡者」から「アルテミス」へ、詩人は夜の中を駆けた。夜の貌は最初怖ろしく、やがて次第に変貌した。夜はその貌つきを変えていっただけではない、それは詩人の内部へ少しずつ少しずつ浸透していった。夜が詩人の内部を充たしたとき、「星」は再び輝きはじめたのであった。詩人は次第に大きくなり、夜の中に融けこむ。やがて詩人の存在は純粋な視線そのものとなって、自らである夜を凝視める。もはや彼の外にあって弾劾する「永遠の視線¹⁾」を怖れる必要もなく、「眼」の代りに「空虚な眼窩」をしか見出せぬこと²⁾を嘆く必要もない。彼は自ら「視線」となったのだから。

夜を超えた夜の中に、時間を超えた時間の中に解放たれて、こうしてネルヴァルの世界が完結するのなら、もうこの上に言うことはない。われわれはひたすらに彼の^{ジエラル}幻想の世界に遊んでいよう、奇怪な言葉の^{ソイニル}怪物がわれわれの魂にのり移り、われわれの魂も又、この真正の夜、真正の時間の中に解放されるまで。しかしわれわれは既に知っている。『オーレリア』のあの一節、美しい婦人の姿が次第に大きくなって自然と一体となり、やがては消え失せて幸福感が無惨に瓦解してゆく、あの一節のように、夜は次第にその濃度が希薄になってその呪縛を緩め、詩人をぼろ切れのような肉体と共に「流れ去ってゆく時間」の中に放り出すであろうことを。

魂が夜の中に王となって君臨^{ポシ}していた時、ジェラルルは何処にいたのか、やさしい眼をした「善良なジェラルル」は？

*

*

*

以下に示すのは、1853年末、『オーレリア』が書き始められる頃の場合である。

アレクサンドル・デュマは、12月10日、以下にその一部を示す、盟友ネルヴァルについての記事を自分の主宰する雑誌に載せた。

ジェラルド・ド・ネルヴァルはこの年8月から、短い退院の期間をはさんで、パッシーのエミル・ブランシュ精神病院に入院中であつた。

— 往々、彼が何かの仕事にはなはだしく心を奪われているような時に、想像力、あの本宅の狂女が、一時的に、彼にとってはお妾さんにすぎない理性を追いやる。こうなると、カイロの阿片吸飲者やアルジェのアシシュ中毒者と甲乙のつけ難いほどの夢と幻覚とはにぐくまれたこの頭脳の中に、想像力だけがとどまって大きな力をふるう。その時には、とりとめのないこの力が、彼を不可能な理論、実現し得ない書物の中へと投げこむのだ³⁾

この記事の最後にデュマは、それより数日前にネルヴァルが紙切れに書き残して去ったという一篇の詩を引用した。そこに語り出された神話がデュマにとってはおそらく「不可能な理論」であると感じられた一篇の詩、どんなにそれが不可思議な世界であるか、読者よ判断してみたまえ、という具合に。

デュマにあつては何の苦もなくなされる作中人物の創造という行為は、ネルヴァルにとっては「ひとつの執念、ひとつの眩暈⁴⁾」となり、「この上もなく奇怪な精神錯乱に彼を陥れてしまった⁵⁾」のである。ネルヴァルはデュマに宛てて書く。

— 自分の前世のあらゆる在り方の連なりをとらえたと信じた瞬間から、私は自分が君主であり、王であり、魔術師であり、魔神であり、神でさえあつたとしても、もはや苦痛ではありませんでした。鎖が切れてしまった時計は、分の代りに時を示していました⁶⁾

デュマへのこの手紙は、デュマに献げられた一冊の本の序文である。そして、デュマによって件の記事の中に引用された詩を筆頭とする12の詩篇、「ドイツ人なら超自然的と呼びそうな夢現状態の中で創られた詩」がこの本の巻末に収められ、この序文の書かれたひと月後に刊行された⁷⁾

この序文の中では又、次のようにも書かれている。

の寝台に横たわる「私」は、同じように拘留されている男の声が、自分の胸の中に反響するのを感じる。

不思議な振動の作用で、その声は私の胸の中で反響し、そして私の靈魂は、幻と現実との間に截然と分たれて、いわば両分されたように思えた。一瞬、私は努力して件の男の方に寝返りを打とうと考えたが、次に、よく知られたドイツの伝説を思い出して、慄然とした。各人は一つの分身を持っていて、それを見る時、死が近いというのである。(I・3)

次いで「私」は、自分を迎えに来てくれた友人たちが、この男を伴って出て行くのを見る。

「違うじゃないか」と私は叫んだ。「俺を迎えに来てくれたのに、出て行くのは別の男だ。」(I・3)

分身の出現は、^{エル・デスデインヤード}「廢嫡者」、^{イダン・テイテ}「アルテミス」に於いて確かめられた自己証明の否定であった。父の寵愛をアベルに奪われるカイン、エロスの影としてのアンテロス、自身の婚礼の席にユースフを見るカリフ・ハケム — 赦され、迎えいられるのは常に分身の方で、「私」の方はそれが為に放逐される。分身との葛藤という図式の始まりである。自己証明を^{イ・ダン・テイテ}獲得するための葛藤、分裂と二重性との葛藤。この物語は、この二重性がいかにして統合されてゆくか、分身との葛藤がいかにして克服されてゆくかについての物語なのである。

ところで件の夜にはじめて出現して「私」を脅かした分身は、今度は、「私」が祖先の靈に案内されて、或る山の原住民を訪れた時再び現われ、凶器を以てその土地の神秘から「私」を追払おうとする。自分に敵意を持つこの「精靈」を、「私」は「狂気」の二度目の発症の中で見ることになる。最初の発症から10年が経過し、愛する女を死は既に連れ去っている。

「神秘の町」の丘に住むあの汚れなき家族たちの住居に私がいった時、私を威したあの同じ「精靈」が〔……〕今は東邦の王族の風体をして私の前を通り過ぎた。私は威しながら彼の方に突進した。だが彼は静かに私の方に振り向いた。おお、慄ろしいことだ、忌わしいことだ、それは私の顔であった。理想化され、偉大と

なった私の全容姿であった。……(1・9)

自分がかくもはっきりと見たものは一体何だったのか、これを見たということの意味は何だったのか——「私」は自問する。

私であって且つ私の外にいるこの「精霊」とは何であったのか。諸伝説にある「分身」か、東洋人が Ferouir (守護神) と呼ぶあの神秘の兄弟か。

突然、「私」は気付く。分身を見たということは単に死を意味するものではない。死後に愛する女性の魂と結ばれる望みを与えるものとしての幸福な死は、寧ろこれ以後、彼には拒まれることになるのだ。そして当然のことながら、それは死よりも苛酷な試煉なのである。

ひとつの怖ろしい考えが思い浮んだ。「人間は二重なのだ」と、私は心に思った。[……]あらゆる人間の裡には一人の観客と一人の俳優、話すものと答える者がいる。東洋人はそこに善霊と悪霊との二つの仇敵を見た。「自分は善い方だろうか、悪い方だろうか」と私は自問した。「いずれにせよ、もう一人は俺の敵だ……[……] (この二個の精霊は) 或る物質的親和力によって共に同一の身体に結び付いて、一方は光栄と幸福に、他方は破滅或いは永遠の苦悩に約束されているのかもしれない。」——一閃の凶光が突然この闇を貫いた……オーレリアはもう私のものではない……(1・9)

最初の出現の際には、「私」にとって判然としなかった分身の意味が、10年を経た今、戦慄すべき明白さで顕われてきたのである。

一個の悪霊が靈魂の世界において私の席を奪ってしまったのだ。オーレリアにとっては、そいつが私自身なのであって、そして彼女に軽んじられ、認められぬ、衰えた私の身体を生かしている悄然とした霊の方は、永久に絶望か虚無かに運命づけられているというわけだ。(1・10)

愛する女性が死によってのみならず、自分に敵対する分身の故に永劫に自分から喪われるというこの認識は、「私」をして絶望的な戦いに臨ましめる。

よし——と私はひとりごちた——あの宿命の精霊と闘おう。相伝と学識との武器を以って、神そのものとも闘おう。闇と夜の中で彼が何をなそうと、俺は存在する。そして俺はなお地上で生きることの許されている全時間を、彼に打ち勝つためにあてよう。(I・9)

ここにはエロスに対して敢然と闘いを挑むアンテロスの姿がある。

私は勝ち誇った神に向って投槍を持ち直す。⁹⁾

だが、アンテロスたることに徹し切れなかった「私」の頭が、絶望の重さにうちひしがれてたれる時、「私」は、宇宙と生命と時間を覆う神秘のヴェールを少しくもち上げて見せてくれた10年前の「冥界下り」に倣って、二度目の「冥界下り」を試みる。最初の「冥界下り」の際、ダンテを導くヴェルギリウスの如くに案内役となり、合図ひとつで敵意を持つ分身を退けてくれた父祖の霊は、だが今は姿を見せない。自分はどこから来たか、自分とは何か、自分はどこへ行くのか——その間は、10年前のその時ももう少しで答えられようとしていたのだが。2度目の試みは惨憺たる結末で終る。「私」は婚礼の祝宴を待つ人々の中にはいりこんでしまうのだが、そこで花嫁がオーレリアで花婿は自分の分身だと思いこむ。「私」にとって、オーレリアが永遠に喪われてしまう瞬間、「私」が自分自身であることの証明が永遠に喪われてしまう瞬間がまさに来ようとしているのだ。笑いものにされたと感じた「私」が、魔力を持つ(と思われた)合図をしようとした刹那、「胸をひき裂くような苦痛の響を帯びた、顛える明瞭な女の叫び声」が「私」の眼を覚まさせる。

私は何をしたのか。私の魂が不死の生存の確信を掴み取っていた魔法の宇宙の調和をかき乱したのだ。私は聖なる掟を犯して懼るべき神秘を極めようと欲したがために、おそらくは呪われたのだ。今はもう天罰と侮蔑をしか期待し得ぬ。苛立った亡霊たちは、嵐の近づくのを感じた鳥のように、叫びを発しつつ、空中に不吉な円を描いて逃れ去った。(I・10)

これがこの物語の第一部の終りである。第一部と第二部の間に、われわれに見えるのはあのソネの第一節における廃嫡者の姿だ。

私は闇に住む者、—— 妻亡き者、—— 心慰まぬ者、
うちすてられた塔に幽閉のアキタニアの貴公子
私の唯一の「星」は死んだ、そして
星ちりばめた私のリュートは「憂鬱」の「黒い太陽」を刻されている。

だがこのあと、この絶望的な闇の状況の中から、過去になしたこととの関わりにおいて夜の反語的な価値を見出し、自らの自己証明イダンティテをも確認して、

私は地獄アケロンの河を2度、勝利者として渡った

とうたうに至る「魔嫡者」エル・デスデインヤードとは異なる精神の軌跡を、この物語の「私」は辿ることになる。しかしこの軌跡を追う前に、われわれは、あの分身の出現の夜以来「私」がその中でも生きることになったもう一つの世界、その世界の神秘が、どのようにして「私」に明らかにされたか、それはどのような具合にあの——自分とは何か、自分はどこから来てどこへ行くのかという——問にわずかながら答えることになるのかを、もう少し詳しく見ておきたいと思う。

父たち、又は反逆

或る夜、私はまちががなく、ライン河の畔りに運ばれたような気がした。[……] 私は一軒の楽し気な家にはいった。入り日の一条の光が葡萄に縁取られた緑の窓扉に悦ばし気に射していた。私は旧知の住居、もう一世紀以上も前に死んだフランドルの画家だった母方の叔父の家に戻るように思った。[……] 私がマルグリットと呼んで、子供の時分から知っているように思えた一人の老婢が言った。「お床にお就きになりませんか。遠くからいらしたことだし、叔父さまはなかなかお戻りになりますまいから。御夕飯にはお起ししましょう。」私は赤い大きな花模様のペルシャ更紗を飾った、柱付き寝台の上に横たわった。私の正面には、田舎風の時計が壁に掛っていて、その時計の上で、一羽の鳥が人間のように話し始めた。この時私は、私の祖父の魂がこの鳥の中にいると考えた。そして鳥の言葉と形とを別に怪しまなかったと同じように、自分がほとんど一世紀あとに引き

戻されていることも怪しまなかった。(1・4)

第一回目の「冥界下り」のプレリュードは、この物語の書き手が幼時を過ぎた田舎の家(実際にはヴァロワ地方にある)のイメージではじまる。「一軒の楽しい家」「葡萄の蔓に縁取られた緑の窓扉」「悦ばし気に射している入り日の一条の光」——これらは、この書き手のどの作品の中にも繰返し出て来る「幸福な時」の象徴としてのイメージである。「幸福な過去」への遡行。そしてその時代に「私」の庇護者であったらしい老婢の登場。マルグリットという名——これは、この物語の書き手の母の名前のひとつであり、母方の祖母の名前でもあり、又、書き手がその精神遍歴に多大の影響を受けていたファウストの愛した女性の名前であり、最後に、書き手がこの物語を書くそもそもの動機を与えた女優の本名でもあった——で呼ばれるこの老婢は、この物語の後半の部分に登場する「私の幼少の頃世話をしてくれた女」と同じ人物と思われる。彼女は、この後半の部分では、悔恨に苛まれる「私」を亡恩の輩だと厳しく責めることになるのだが——これも、従って、この老婢の中に「私」が感じとっていた二重性なのである——今は、「私」を昔通り優しく床に就かせるのである。「あなたは遠くからいらした」——彼女のこの言葉は何を意味しているのだろうか。ヴァロワ地方はパリから遠くはない……それとも年老いた彼女には、都は遠いところだったのだろうか。あるいは——これは現実の話ではなく、夢の中でこの場面が展開されるのは章の冒頭に示されているようにライン河の畔りなのだから——彼女はそこがライン河畔であるという前提のもとにこう言ったのか。「遠くから来た」——この感概はしかしながら実際の地理的な距離の移動に対して抱かれたものではおそくない。「私」の幼少の頃から「現在」に至る長い時間の経過、その間に「私」は成人し彼女自身は老いた、その時間的な遠さを、彼女はこう言い表わしたのかもしれない。又、普通の会話と異なり、夢の中のこうした会話には、老婢の、ではなく、夢を見ている「私」の(従って書き手の)感情(あるいは無意識の部分)が、この老婢の言葉に投射されているということにも留意しなければならない。さらにここでは「ライン河」が「私」にとって(つまり書き手にとって)特別な意味のある河だったことを憶い起す必要がある。ライン河は、書き手が、その精神の故郷であるドイツへ、あるいは東方^{オリエント}へ、あるいは北の国へと旅に出る時、旅から帰る時、必ず渡らねばならない河であった。夢の中でライン河は未知の場所へ旅するために渡らねばならない河の象徴としての意味をになっている。¹⁰⁾ この物語を書くと言明し、実際に書き始めた時期を含む長い入院から解放された直後、

書き手はドイツへの旅に出るが、その時友人に宛てた手紙に彼はこう書いている。

奇蹟だ！ラインの岸辺にふれると、ぼくは自分の声と力とをとり戻したのだ！¹¹⁾

手紙の書き手は、アンテロスの — 打ちまかされ、大地に投げつけられると、その度に大地から力を得て又起ち上ったといわれる巨人アンタイオスの末裔たるアンテロス、地獄の河に三度漬けられて不死身となった¹²⁾ アンテロスの — 貌をもっている。あるいは、地獄の河を二度、勝利者として渡って生還した「廢嫡者」の貌を。彼にとってライン河とは地上における地獄の河であったのだ。「私」が夢の冒頭で運ばれたライン河の畔りは、実は地獄の河の畔りなのであり、彼はこれからその河を渡って死の国へと下りてゆくことになる。「あなたは遠くからいらした」という老婢の言葉は、従って、生者の国から遙々死者の国の入口までやって来た者に向って言われたねぎらいの言葉であると同時に、「私は遠く（つまり地上に生きる者の時間・空間を超えたところに）まで来た」という「私」の感慨の表明でもあるのだ。

さて老婢のすすめに従って寝台の上に横たわった「私」の正面には「田舎風の時計」が掛っている。今から「もうひとつの時間」の中へ下りてゆこうとする時、いつも象徴的なこの時計が現われる。あの、「人生の朝に人の心を魅惑し迷わせる悪夢」の物語¹³⁾を憶い出そう。出発の決心をする夜、「私」の前には「ルネッサンス時代のべっこう張りの振り時計」がある。

[……]二世紀このかたねじを巻かれたことは絶えてなかった。— 私がトゥーレーヌでこの時計を買ったのは、時刻を知るためではなかったのだ。¹⁴⁾

今「私」の正面に掛っている時計も、「私」にとっては時刻を示すものではなく、そのかわりに、その上にとまっている鳥が人間の言葉で話しはじめる。そしてこの鳥の言葉を契機として、「私」の「冥界下り」が始まるのである。

鳥の形をとって「私」に話しかけたのは祖父の霊であった。霊に導かれて「私」は地下の世界へと下りる。この世界で「私」は、幼時に「私」を育て、古代宗教への憧れと畏れとを育ててくれた叔父に再会する。叔父は「私」に語る。

— 虚無は世人の解するような意味では存在しない。[……]われわれの過去と未来とは連帯している。われわれはわれわれの種族の裡に生き、われわれの種族は

われわれの裡に生きているのだ。(I・4)

時間はもはや地上でのように流れない。死は終りではない。生命は時間によって滅ぼされるのではない。真の時間は生命を満たす。

この観念は私にすぐ可感のものとなり、そしてあたかも室の四壁が無限の遠景に臨んで開けたかのように、私がおの中におり且つその全体が私自身であるところの連綿と続いた一連の男女を見るように思われた。あらゆる民族の衣裳、あらゆる国々の姿が、あたかも私の注意能力が互いに混ざることなく幾つにも殖えたかのように、一世紀の事蹟を一瞬時の夢に籠める時間現象に類した空間現象によって、一時にはっきり出現してきた。先に私はこの室にいる人々の姿が束の間の無数の外容に分たれて組み合わせられてゆくのを見たが、今この果知れぬ一人一人の行列を成しているのがただこの室にいる人々だけなのを見て、私の驚きはいよいよ深まった。(I・4)

「狂気」がこの物語の書き手に与えた最も素晴らしい幻影^{グイロソフ}の表現のひとつがここにある。一であると同時に多であり、束の間であると同時に永遠であり、連綿と続いていると同時に幾多の細部に分たれているという、相対立する要素を含んでしかも何の矛盾も感じさせない時間と空間——日常の時空を超えた時間・空間の本質の、これは視覚化である。その中に過去と現在と未来とがその十全の意義を孕んで開示される、そうした「瞬間」。これはまさにバシュラール言うところの「噴出する時間」である。こうした時間の体験は、件の問——われわれはどこから来たか、われわれとは何か、われわれはどこへ行くのかという問——へのひとつの解答となるだろう。われわれは種族の裡より出で来たり、われわれは又種族の裡に甦る。われわれは一瞬にして永遠なる時間を生きる者であり、同時に死せる者である。——この物語の書き手の脳裏を離れることのないあの「冥界の神々に捧ぐ」という碑文を憶い出そう。

そは男にあらざ女ならず両性^{ヘルマプロディートス}具有者ならず
乙女にあらざ、若からず、老女にあらざ、
純潔ならず、売女にあらざ、しとやかならず、
これらすべてなり。

そは死せるも

飢えの故にあらず、劍にても毒にても殺されたるにあらず、
これらすべてによるなり。

そは天空に在らず、水中にも地中にも在らず
随所に存在するなり。¹⁵⁾

対極にある諸々の概念をすべて包みこんで、しかもひとつの統一体としてある — それ「私」の本来的な在り様^{よう}であり、その内的時間の在り様である。

かくして、最もすぐれた精神をも襲うかの靈魂不滅に対する永遠の懷疑は、私にとっては氷解していた。もはや死もなく、悲しみもなく、不安もなかった。私の愛する人たち、親戚、友人は、それぞれ確実な永生の徴を示し、私は今は、ただ昼間の時間によって彼らから隔てられているにすぎなかった。私は心地良い哀愁の裡に夜の時間を待った。(I・5)

だが、地下の種族に許された、こうした稀有且つ特権的な瞬間の享受、あるいは自己認識は、「勝ち誇る神」¹⁶⁾の妬むところになる。何故なら、彼によれば、終末へ向って流れる時間を免れ得るのは唯一人、「神」自身のみであるべきだからだ。「私」の「冥界下り」はそれ故、あの、「かの神」に呪われたカインの末裔たる芸術家アドニラムの地中への旅と、そしてその折の父祖との対話と二重うつしになっている。アドニラムの案内者トバルカインは語る。

「あの神は強いというより狡い、寛大というより嫉妬深いのだ、あの神アドナイは！ 彼は火の精霊どもを無視して、土の人間を作った。それから、われとわが創造物と、その悲しい被造物に対する精霊どもの涙などには容赦せず、人間に死を宣した。そこにわれわれを分つ確執の根源がある。¹⁷⁾」

更に、彼の一族である火の族の無限の生命の原理について、

「火から発した地上の全生命は、中央に君臨する火に牽かれる。われわれは反対に中央の火が周囲から牽かれて外に輝くことを欲した。この原理の変換は無限の生命であった。¹⁸⁾」

「私」が東洋の伝承と自らの夢想(回想、と「私」は呼ぶ)とを基にしてひとつの歴史体系を書き表わそうとしたのは、生命と時間を覆う神秘のヴェールがこうして彼にとっては少しもちあげられたように思えた故であった。「私」は、アドニラムと共に地下の世界の秘密を更に探ねることも出来たであろう、アンテロスと共に「かの神」に向って「槍を投げ返す」ことも出来たであろう、もし「私」と同じ顔、同じ身体つきを持つあの分身が、「私」の自己証明を脅すことさえなかったなら。そして、はじめての錯乱の夜のあの確信、「あの星の中に俺を待っている人々がいる。[……]俺の愛する女は彼等の中ひとにいて、われわれ二人はあそこで再会する筈になっている」という幸福な確信を持ち続けていられたのかもしれないのだ。だが分身の出現はその望みを打砕いてしまった。死によって一度喪われた女ひとは、「かの神」の掟を敢えて犯した罪により、「私」から「再び失われてしまった」。この物語の第二部は、この絶望的な叫びで始まる。

母・恋人・女神、又は罪と赦し

エウリディケーよ！ エウリディケーよ！

再び失われてしまった。

すべては終わった、すべてすんでしまった。今はこの私が死ななければならぬ、希望なく死ななければならぬのだ。——死とはそれならば一体何か。もしそれが虚無だとしたら……願わしいことだ。しかし死を虚無たらしめることは「神」自身にも出来ない。(Ⅱ・1)

愛する女に罪を宣せられ、赦される望みなく悶々とした日々を過していた頃、¹⁹⁾死は「私」にとって甘美な誘惑であった。歓びを与えてはくれないとしても、少くとも無感不動の中に憩わせてはくれるであろうから。²⁰⁾

愛する女の肉体が死によって奪われてから、死は「私」には単なる休息の場以上のものとなる。生きている間は望むべくもなかった魂の合一が、「死」によって冥界で成就され得るという確信を得たからである。最初の「冥界下り」はこの確信を強めてくれた。死は、あの時に垣間見た、連綿と果しなく続く靈魂の鎖の中に、もはや地上へ帰らねばならないという苦い思いなしに、「私」をたちかえらせてくれるはずで

あった。エロヒムの末としての本来の在り様、「各霊が同時に人であり『神』である²¹⁾」という在り様を「私」の靈魂にも返してくれるはずであった。その時はじめて、「私」は、神格化され「女神」となった女性、最初の錯乱の夜、「アジアの空の神秘的な炫耀のうちに、捉え難くのがれ去った²²⁾」あの女性と再会できるはずであった。だがその希望は潰え去った。冥界において「東邦の王族の風体をし」、「私」の愛する女性をまさに娶ろうとしていたのは、「私」の分身であった。今や「私」は、「かの唯一の神」、「私の精神の裡に創り出された宿命的理論体系が、その孤独の王位を認容しなかった²³⁾」かの神の執念深さ、その復讐心の怖ろしさに戦慄することになるのである。「かの神」が一人の人間を形成する二重の人格のうち、彼の愛さなかった方の片割れを投げ込む希望なき死は、虚無よりも酷い劫罪なのである。「私」は絶望の裡に呟く。

魂が、生と夢との間、精神の混乱と冷静な反省の復帰との間を、定まらず漂っている時、救いを求むべきは、宗教的な思いの裡だけだ。(Ⅱ・1)

それでは「私」は今、「火の精霊」の一族たる誇りを捨て、「泥土の子らに魂を与えた者²⁴⁾」に膝を屈するのであろうか。「無垢は学ばれるものではない²⁵⁾」と叫ぶつも、「かの神」を讃えるための「神秘的殿堂²⁶⁾」を建て直そうとするのであろうか。

判った — と、私は心に思った — 私は創造主よりも被造物を愛したのだ。私は自分の愛する人を神格化して、最後の息をキリストに捧げた女を、異教の習慣に従って崇めた。だが、もしこの宗教が真実を語るなら、「神」はまだ私を許して下さるかもしれぬ。もし私がその御前に心貧しく跪けば、彼女を選して下さるかもしれぬ。彼女の霊もおそらく私の裡に戻って来よう。(Ⅱ・2)

そう、「私」は跪くのだ。跪いて祈るのだ。

— 神よ、神よ、かの人のため、ただかの人のために、神よ、赦し給え。(Ⅱ・2)

だが赦しを願う「私」の前に展開される夢は仮借ないものとなる。十年前に夢の中で「私」にやさしく接してくれた老婢は、今は「私」を責める。「あなたは自分の年とった身内たちの死を、あの女を悲しんだほどに深く悲しみはしなかった。それ

でどうして赦しを望むことが出来ましようぞ」と。あの、類い稀な啓示によって示された、鎖の如く切れ目なく続いていた幾世代もの、そして地上の全ゆる国々の男女の姿は今は現われるべくもなく、そのかわりに、さまざまの時代に識った人々の顔が「糸の切れた数珠の玉のように²⁷⁾」ばらばらに浮んでは消えてゆくばかりである。

—「あちらで私を待っている」と、私は考えた。— 何時かの鐘が鳴った……。私は心に言った、「もう間に合わぬ。」幾つかの声がそれに答えた、「彼女は失われた。」(Ⅱ・2)

「かの神」が、死すべき者として創った人間を投げ込んだあの時間、「かの神」ひとりが免れているあの時間が「私」を捉えようとする。「まだ間にあう」—「もう遅すぎ」— 相矛盾する叫びが「私」の内部で鳴り響く。時間との葛藤 — それは「かの神」との葛藤であった。否寧ろ、「かの神」の前に素朴に跪こうとするあの分身と、それに抗う「私」との間の葛藤であった。「そのいくつかの点に関してかって哲学的偏見を懐いていた怖ろしい宗教の教義と勤行に身を投じることへの危惧²⁸⁾」、「かの神」の時間の中に捉われることへの怖れは、「私」の中に執拗に残る。

— 私はついぞ母を知らなかった。母は昔のゲルマンの妻たちのように、軍隊の後から父に随いて行くことを望んだのであった。そして或るドイツの寒い地方で発熱と過労とで死んだ。(Ⅱ・4)

母親不在のまま、「奇妙な伝説と異様な迷信に溢れた」国で異教的な教育を受けた「私」は、母親の温もりに包まれて素朴な信仰心を以て「かの神」の前に跪く体験を持たなかった。素朴な人々の「神秘的殿堂」ははじめから「私」には拒まれていたのである。そして「かの神」は常に、「私」にとっては、アダムを追放し、カインとその族を憎む、弾劾者としての貌しか持たなかった。「私」と「かの神」との関わりはかくの如きものだったのだ。

けれども今、「私」は「知恵の樹」を捨て「生命の樹」へと向う決意をする。²⁹⁾ カインの末裔は今や、もうひとりの自分、愛されるアベルたんとする — 否、アベルではない、カインとアベルを産したアダムですらない、アダム以前の間人、もし「かの神」がアダム以前に彼を創ったなら、その純粹の無垢故に彼を天国から追放することも、時間の中へ投げこむことも、その上に圧倒的な力で君臨することも出来な

かったであろう、そうした存在たらしめるのである。だがそのようなことが一体可能なのだろうか。「かの神」は追放すべき人間を創る意志しか持たなかったとも言えるのだから。

こうした「私」が、真に心貧しく跪けるのは、聖母マリアの前であった。マリアは「私」にとっては母性の象徴であり、聖なる愛の象徴であった。マリアは同時に母であり、恋人だったのだ。もし「かの神」と「私」とを和解させてくれるものがあるとすれば、それは、地上からは永遠に喪われたこの二人の女性の魂の宿る存在である処女マリアをおいてあり得ない。

絶望して、私は涙を流しながらノートル＝ダム・ド・ロレット教会の方に向い、そこで自分の誤ちに対する赦免を願って処女マリアの祭壇の御許に身を投げた。私の裡の何ものかが私に言った。「処女マリア様は亡くなった。お前の祈りも無駄だ。」私は内陣の一番後ろの場所に行って跪き、そして指から銀の指環をはずした。指環の宝石の場所には、次の三つのアラビア語が彫られていた、Allah! Mohamed! Ali! (Ⅱ・4)

「私」のこの象徴的な行為は、^{オリエント}異邦の宗教を捨て、「かの神」の許に赴く決意の表明であった。錯乱はこの時三度「私」を襲い、「私」は「黒い太陽」と「数多の月」との幻影を見る。黙示録に示された世界の終焉 — 「私」の心象の外界への明らかな投与である。つまり「私」は「かの神」に属する時間の中に今や捉われていて、その時間は終局に近づいている。近づく最後の審判の後に救われる望みはなく — とりなしの役目をしてくれるであろうマリア様は死んでしまった — 「私」は「希望なき死」の覚悟をする。

陋屋に火の気なく、窓にガラスもないところで
私は天国と地獄のつなぎ目を見つけようとしています。
しかもついに私は、もう一つの世界に赴くため、脚絆を巻いたのです。
私は自分の墓碑銘を作りました[……] ³⁰⁾

われわれの眼に、友人のドイツの詩人に向って「一切は終わった、われわれは死ぬ覚悟をしなければならぬ³¹⁾」と言う「私」と、自らの墓碑銘を書く男の姿が重なって見える。だが物語の書き手は、この絶望の極みにあって書かれたこの詩について

は言及しない。彼はこのつらい時期をいかにしてか切り切って、生きて、今その物語を書いているのだから。彼は墓碑銘を書いた「私」をではなく、まだ希望を持っている「私」、創作に執念を燃やす「私」を書く。その創作は、デュリー夫人が書いているように、「思い出によって過去と現在を結びあわせる」試みなのだが、それ以上に「その現在と過去とを、憶い出の前段階的なものから自分の中に浮び上がってくるように見えるものと結びあわせようとする³²⁾」努力なのだ。この作品の執筆は従って、自己の「時間」の再発見、再把握の試みであり、「推敲が非常に心を動揺させた」のは当然である。だがこの作品においては、書き手である「私」の個人的な過去・現在と、個人的な体験を通して垣間見られる普遍的精神世界の結びつき、即ち、個としての神話と普遍的な神話世界との結びつきは最後まで追求され得ていない。それは、この時期、「狂気」の状況の只中であって「狂気」を見ず、「時間」をたずねながら内的時間の本質を見つめきっていない故であろう。

この作品 — 美しい作品であり、「自分の最も会心の作品」と、作者である「私」も述べている — の執筆と完成とは、しかしながら、「私」の精神に或る好ましい打撃を与えた。

(この作品の) 発表後数日して、私は執拗な不眠に陥ったことを感じた。(Ⅰ・5)

不眠、そして異常なまでの行動欲 — 絶望の淵に沈みこんでいた魂がゆさぶられ、反動で異様な昂揚を示しはじめ、無力感に苛まれていた「私」の行為は象徴的な力を持ち始める。「私」が水の中に投げこんだ指環が「洪水」をくいとめる。

[……]そして一条の太陽の光が輝きはじめた。希望が私の心に戻って来た。
(Ⅰ・5)

この太陽の光線はアリアドネーの糸だったのであろうか。夢と錯乱は、これ以後、「私」に再びもう一つの世界の幻影を贈りはじめる。はじめての錯乱の夜に見た女神、「いつも変わらず、微笑みながら、その様々な化身のひそやかな化面を次々にかなぐり棄ててやがて最後に、アジアの空の神秘的な炫耀のうちに捉え難くのがれ去った³³⁾」あの女神が再び現われる。そして「私」に告げる。

「私はマリアその人であり、そなたの母その人であり、又、あらゆる姿の下に常

にそなたが愛したその人です。そなたの試煉の一つ一つのごとに、私は面を蔽っている仮面の一つを脱ぎ棄てて来ました。そなたはやがて、在るがままの私の姿を見るでしょう……。」(Ⅱ・5)

「私」には女神イシスと思われたこの女神の約束を契機として、苦悩は秘伝伝授^{イニシアシオン}のための試煉となり、それ故に歓喜と緬い交ぜになる。宇宙との交感が再びはじまる。宇宙は「私」の内部に浸透し、「私」は宇宙の内部に参入してゆく。一瞬は永遠となり、永遠は一瞬の裡に現出する。

自分が聖なる秘伝伝授^{イニシアシオン}の試煉に服しているというこの点に確信を持って以来、金剛不壊の力が私の精神の裡にはいつて来た。私は自分を、神々に見守られている生ける英雄だと感じていた。自然の中の一切が新しい様相を帯び、秘かな声が草木から、動物から、最も微々たる虫類からも洩れ出て、私に予告を与え私を鼓舞するのであった。仲間の言葉は神秘的語調を帯びて私はその意味を理解し、形なく生命のない物象も自^{その}から私の精神の動きに応じた。——小石の組み合わせや、隅や割れ目や隙間の形、木の葉の裂け目、色、香り、音から、私はこれまで知らなかったさまざまな調和が現われ出るのを見た。私は心に思うのであった。「どうして自分はかくも長い間、自然の外に、自から自然に同化せず存在し得たのであろう。万物は生き、万物は動き、万物は呼応している。私自身又は他の人々から放射する磁気線は、創造された事物の無限の連鎖を、何ものにも妨げられず貫通する。それは世界を覆うある透明な網目であり、その細かい糸は次から次へと惑星へ、さらに恒星へとひろがっている。今は地上に囚われの私も、わが悦びとわが苦しみをともしする星々の合唱に和するのだ。」(Ⅱ・6)

解放の時は、だが、まだ来ない。「巫女」は「まだコンスタンティヌスの凱旋門の下に眠り³⁴⁾」、「いつの日か地上に再生する運命を背負った悲し気な亡霊たち」は、「光薄れてぼろぼろになった三日月³⁵⁾」の中に時の到るのを待って隠れ棲む。

私は想いを聖なる母にして妻なる永遠のイシスに移した。私の一切の翹望、一切の祈願はこの魔術的な名の中に混じって、自分がこの女神の裡に甦えるのを感じた。時として女神は古代のウェヌスの相をし、又時としてはキリスト教徒の処女マリアの面影を以て現われた。(Ⅱ・6)

「私」の内部で、古代の宗教とキリスト教との葛藤が、イシス女神への信仰の中に止揚される。この偉大な女神の庇護は今や「私」の上であり、「私」は間もなく彼女によって新しい生を得るだろう。一夜「私」が幻想の中で運ばれた「エローラの深い洞窟」は、母＝イシス＝マリアの胎内だったのだ。そこは同時に又、「広大な納骨所」、即ち墓でもあった。誕生と死——この二つの現象は、人生のはじめと終りの不動の門の如きものではない。「私」の魂にとっては各瞬間が誕生であり、各瞬間が死なのだ。胎児としての「私」、地上に生けるものとしての「私」、そして死者としての「私」——「私」の在り様のすべてが、女神イシスの裡に抱きとられてゆく。

再び分身、又は贖罪

私は或る塔にいた。地の方には極めて深く、天の方には極めて高い塔で、これでは私の全生涯はこれを上下することに費されてしまわなければならぬように思えるほどであった。私の体力ははや尽きてしまった。私が今にも勇気を失おうとした時、突然横手の扉が開いた。一人の精霊が出て来て私に言った。「兄弟よ、来い……。」なぜか私はこの精霊がサテルナンと呼ばれると思いついた。(Ⅱ・6)

Saturnin — Saturneはサトルケヌス農耕の神、ユビテ天地至高の神以前の黄金時代を支配した神、*Les Chimères* にうたわれる古代の神。Saturne は又土星、太陽の夜の代表者、地獄における太陽の影、黒い太陽。サテルナンはつまり、「土星びと」を表わす。³⁶⁾

黒い太陽、地獄の精霊、古代の復帰……われわれの前に再び、「エルクステイラド廢嫡者」、アルテミス「アルテミス」、デルフィカ「デルフィカ」の世界が想起される。「私」は、サテルナンと共に、又あの反逆の火の燃える夜の中へ戻ってゆくのか？——だが今、精霊は、あたかも信者を祝福する司祭の如くに「片手をのばして私の額にあてた³⁷⁾」のである。

すると直ちに空に見える星の一つが大きくなり始め、そして例の私の夢の女神が、昔私が見たままに、ほとんどインド風の衣裳を纏ってにこやかに現われてきた。女神はわれわれ二人の間を歩み、そして草原は緑となり、その足跡の上に花と葉が地から生えた……。女神は私にこう言った。「そなたの課されていた試煉の時は終わりました。[……]」(Ⅱ・6)

女神が三度、夢の中にあらわれる。此度は精霊サテルナンを仲介として。サテルナンとは一体誰だったのか。果しない階段の試煉から「私」を救い、女神の出現を促してくれた神秘の「兄弟」とは —

精神病院の入院患者の中に食物を拒否し、一切の人的活動を止めてしまった若者がいた。「私」はこの「生存の最終の戸口にスフィンクスの如くにすわっている³⁸⁾」存在に心を打たれ、「或る磁気」によって彼と結ばれていると感じる。「私」は彼に心を通わせることに心を砕く。

私はその不幸と断念の故に彼を愛し始め、そして、この同情と憐憫によって自分が立ち直るのを覚えた。かく死と生の間立つこの男は、私には最高の通訳者の如く、言葉が敢えて伝え得ぬ、又は表現するに成功し得ぬかの靈魂の秘密を聞くべく定められた聴罪司祭のごとくに思われた。(Ⅱ・6)

この若者が、夢の中にサテルナンとなって現われるのである。

これは又、かの分身の変貌した姿に他ならない。第一部では「私」に敵対し、「私」の希望の全てを奪うと見えた分身が、今やサテルナン — saturnin (= saturnien) は、Jupiter の jovial (陽気な、快活な) に対して、triste, mélancolique (悲し気な、陰鬱な) を表わす形容詞でもある — として、「私」の影の部分を作している。分身と「私」における光と影の関係は、今や逆転した。「私」は彼に対する愛、又は同情と憐憫とによって、自らも又救われるのである。かの若者との間には対話が復活する。物語の最終ページにある彼と「私」の会話は次の如くである。

「なぜ君は他の人たちと同じように飲んだり食ったりしたくないのか」と私は言った。——「俺は死んでいるからだよ」と彼は言った。「俺はこれこれの墓地のこれこれの場所に埋められたのだ……。」——「じゃ今、君はどこにいるつもりなのだ。」——「煉獄で、自分の贖罪を果しているのだ。」(Mémorables)

分身は「私」自身の罪の贖いとして自らを挺したのだ。

今試煉の時は満ち、「私」と分身はとりなしの女神をはさんで共に歩む。分身との和解は自己証明の再獲得である。「私の気高い友 (= 女神)」は、「私」を「兄弟」と呼んで励ます。同じ血を分けた者へのこの呼びかけは、「ソロモンと暁の女王の物語」や「ポリフィールスの夢」をもちだすまでもなく、「私」にとっては至上のもの

なのだ。

私は非常に楽しい夢から醒めた。私は変貌して光り輝くかつて愛した女性に再会したのだ。空は栄光に満ちてひらかれ、私はそこにイエス＝キリストの血判を捺された赦免という文字を読んだ。(Mémorables)

—「私」の神話の大団円。かくて「私」は世界の秘密の中に参入し、そこに「私」は消え去って、あとには言葉によるもろもろの世界の描出 — 否、これこそは真の世界の創造……

寂とした闇の深所から、二つの音符が鳴り渡った、一つは低く、一つは高く。

— すると直ちに永遠の天球は回転しはじめた。祝福されよ、おお神々しい讃歌をはじめた最初のオクターヴよ。日曜から日曜へかけ、すべての日を汝の魔法の網に掬いとめよ。汝がために山は谷に歌い、泉は小川に、小川は大河に、大河は大洋に歌う。大気は顛え、光は現われそめる花々をなだらかに綻ばす。愛の吐息、愛のおのきが大地の膨らんだ胸から洩れ、そして星々の合唱が無限の裡に展び拡がる。遠ざかつては引き返し、縮まっては花のように拡がり、そしてかなたに新しい創造の種を蒔く。(Mémorables)

—だが、これは本当に大団円だったのだろうか。

時間をはじめと終りを持つものでなく、生命が死によって断ち切られてしまうものでないように、芸術にも結論はない。大団円と見えたものも次の瞬間には悲劇となり、悲惨の極にあったものが、次の瞬間には至福の中にある。むしろそれは、光と闇の間を絶えず揺れ動く空中ブランコのようなものかもしれない。この物語の偉大さは、その最後のページで「私」が到達し得たところにあるのではなく、そこに至るまでに展開される精神的葛藤の描出にある。それはおそらく、単なる憶い出の記述などではなく、生の証の探索の最も赤裸な告白である。ベガンと共に、こうした作品は、書き手の運命が決定される場そのものとなるのだと言うことが出来よう。

われわれは最後に、この物語が書きはじめられた頃から書き手の死に至る時期に書かれた文章のいくつかを、何ら考察や解釈を加えることなく提出してみようと思う。創造された「私」ではなく、そこには書き手自身である「私」がいる。しかしこ

れら二つの「私」がいかに分ち難く結びついているか、読者はごらんになるであろう。「作品」として創作されたのではないそれらの文章は、それ故一層、この詩人の人生そのものが「作品」であったことを示している。

生命を賭けた光と闇の間の空中ブランコ ―

Ⅳ <<EPITAPHE>>

私は神にもろもろの出来事を少しでも変えてほしいと願いはしない。事物に対する私のあり方を変えてほしいと思う。私のまわりに私に属する一つの宇宙を創造する力を、私の永遠の夢にただ忍従するのではなくかえってそれを支配する力を、残してくれるよう願う。そうすれば、確かに、私は神となるだろう。³⁹⁾

今日は11月27日、日曜日、あなたのこの病院に入ってから3ヶ月たち、ぼくの試煉は終わりました。＜奥儀を伝達された者＞の言葉を借りるならば、「＜智慧＞の祭壇の上にオシリスの鍵を預けた」のです。大きな責任から解放された気持ちです。⁴⁰⁾

今ぼくが書いていることは、あまりにも小さな輪の中をぐるぐる回りすぎている。ぼくは自分自身の身体で自分を養っている。しかも再生は出来ないんだ。⁴¹⁾

[……]すでにぼくは天体のように身体が熱く燃えあがるのを感じる。しばらく消えていたのだが、ぼくの最も美しい日々のあの古い太陽に出会って再びぼくは火がついたのだ。

ぼくはあの神聖な火を全く死滅するがままに放っておいたでしょうか？……いや、ロピタル通りの巫女ならそれもよい！ぼくは女神の遅い助けなんか待たないで、枝を持って登ってゆく。⁴²⁾

私は、自分が死んで、この、神の第二の生を成就しているような気がする。⁴³⁾

必要なことは何か。来世に対して眠りに対するように備えること、まだ間に合う。―― 遅すぎるかもしれない。

救われるためには悔悟だけで足りると聖書は言う。しかしその悔悟は真摯でなければならぬ。それにもし、この悔悟を妨げるような出来事に襲われたら？もし熱病や狂気の状態におかれたら？もしも贖罪の扉が塞がれてしまったら？……⁴⁴⁾

ぼくが体験した奇妙なことは、おそらくぼくにとってだけしか存在しないでしょう。ぼくの脳は幻影であふれんばかりだし、ぼくは夢を現実の生活から分離することが出来ないのですから。[……]見たこと、考えたことについて書くためには、今は環境の静けさだけでなく、内的思考の平静さがぼくには必要なのです。ぼく自身の内部の平和、ぼくはそれをもう一度とり戻す希望をまだ持っています⁴⁵⁾

お別れして以来ずっととても元気でやっています。来月「パリ評論」に載る作品の最後の部分を進めています。[……]

マインツを通った時、ぼくは《3人の東の博士》の墓を興味深く見ました。あなたは3人の中のひとりに似ておられます。ぼくはまたあの星が空に輝くのを見、そして思い出しました⁴⁶⁾

ぼくは気狂いだ。——ぼくはジャンンに幸福をもたらし、黄金の作り方を教えてやろう。これで全部だ。だが彼にはその忍耐力がないだろうと思うとうんざりする。彼は神様がすっかり作ってくれたのを頂戴する方がいいのだ。——ところで神はひとりだけいる。どこかに——かっこう鳥の中に。——もしかしたらたくさんいるかもしれない。——ぼくはそれが怖ろしかった。しかしながら、わが友よ、君は、かのギリシア人たちが言っていたようにまだぼくが病気だと思うことだろう！ジャンンはよく理解したが——全部ではない——彼は全てを知っている。あるいはやがて知るだろう。

出来れば今夜、でなければ明朝、ぼくに会いに来てくれたまえ。

GERARDであった人間、そしてまだ GERARDである者。répas(名誉)、栄光、幸福、報いを(君たち全部!と、あなたがた全部に)⁴⁷⁾

すべて成就した。もはや責めるべきはぼく自身だけ、ぼくの短気から樂園を逃げて来たのだから。これからは苦悩の中で仕事をし創作をするのだ。[……]

すべてはやがて明らかになり、ぼくは恩寵を取りもどすだろう⁴⁸⁾

すべては結末にある⁴⁹⁾

ぼくのやさしい、なつかしい伯母さん、あなたの息子に言ってやりなさい、あなたほど良い母親、あなたほど良い伯母はいないということを彼はわかっていない、と。ぼくがすべてに打ち勝つ時には、あなたの家にぼくの居場所があるように、ぼくのオリュンポスの山にあなたの席を作ってさしあげます。今夜はぼくを待たないで下さい。夜は黒く、そして白いでしょから⁵⁰⁾

「墓碑銘」⁵¹⁾

彼は生きた、ときには陽気に、あの椋鳥のよう、
恋こがれたり薄情だったり優しかったり、
ときには哀しみのクリタンドルのよう、沈みこみ、夢におぼれて。
ある日彼は扉をたたく音を耳にした。

それは「死神」だったのだ！　そこで最後の詩に^{ソナ}
終止符を打つまで待ってもらい
彼は落着いて、冷たい棺の底に
横たわり、そこで身体を頼わせた。

怠惰だった、とひとは言う。
ものを書いて、インクが涸れ勝ちだった。
すべてを知ろうと望みながら、何一つ知ることはなかった。

ある冬の夕べ、ついに、この世に倦んで
魂が立去るときが来た。
「どうしてきてしまったのだろう」と呟いて、彼は行ってしまった。

終 章

ギリシャ神話が展開される時間には二つの相があるという⁵²⁾ ひとつはゼウス以前の神々に属する時間性で、アイオンの時間、即ち永遠である。今ひとつはゼウス以後の神々の持つ時間性でクロノスの時間である。ヘーシオドスによれば、アイオンの時間を属性とする神々には、原初神混沌、大地をはじめとして、カオスから生じた幽冥と夜、ガイアから生じた天、山、海、さらに夜から生じた定業、死の運、死、眠り、夢たち、苦悩、運命たち、……などがあるという。大地と天の交わりによって生まれたクロノスとレイアーからゼウスが生まれ、クロノスの時間の世界は、ゼウスの世界支配によって確立する。

アイオンは存在の時間様式であり、クロノスは生成の時間様式である。存在 — 常に不変であり、動かないもの — と、生成 — 絶え間なく成長し変貌してゆくもの —、この二つの世界が会うとき、象徴的世界が生まれ、この世界を語るのが神話なのである。人間の生きる時間様式がクロノスの時間 — 生成 — であることをわれわれは本論考の第一章において見て来たが、この人間の生命が、アイオンの時間に触れるとき、そこに象徴的時間が生まれ、その中で芸術作品は創作される。

ネルヴァルの詩作品のいくつかは、こうして、「夜」との、あるいは「死」「苦悩」「運命」「夢」との出会いによって生み出された。二つの世界の出会いによってとび散る激しい火花の如き詩作品。だが『オーレリア』のような作品を書くには、もっと持続的な、身をすり減らすような努力が必要であった。その中の幾ページかで、やはり火花は美しく炸裂している。しかしその間のページをペンは埋めてゆかねばならなかった。つまり生きてゆかねばならなかったのだ。アイオンでもクロノスでもない時間、ただ流れ去ってゆくだけの時間が詩人を呑みこもうとするのに抗って。プーレは言う。「人間の最も大きな苦しみは、自らの幻想を失うことにあるのではなく、その幻想を再び生れさせる方法を失うことにある⁵³⁾」と。アイオンの世界とクロノスの世界との出会いは、そしてその出会いから起る火花の炸裂は、いつも思い通りに見ることが出来るというわけのものではないのだ。しかもこのことに加えて、書くという行為が本質的に持っている自己矛盾があった。書くペンの下から免れてゆくあらゆる瞬間。しかも書いても書いても、書いている「私」を書くことは出来ない。自己を対象とした創作は、それ故、無限退行に他ならない。ネルヴァルにとって真の地獄とは、この無限退行ではなかったのだろうか。

実現し得ない書物 — デュマが言ったのとは又別の意味で、ネルヴァルは実現し得ない書物を書こうとしていたのかもしれない。だが、それ故にこそ、それはネルヴァルによって書かれなければならなかったのだ。

「私たちは自らの内奥を探るために内奥に降りてゆくにつれて、困惑から不安へ、不安から恐怖へと移る。自己認識をすることは、いつもあまりに高くつくものなのだ⁵⁴⁾」と、シオランは言う。

誰れもが支払えるわけではない代償を敢えて払って、ネルヴァルはこの書物を書いた。そしてあのいくつかの詩を。それらの作品はわれわれに、一個の魂の神話と、この神話を通して普遍的世界の神話を示してくれる。

われわれはどこから来たか、われわれとは何か、われわれはどこに行くのか — 神話の中にのみ、その答は語られている。

FIN

註

- 1) 神を「眼」にたとえることは古来よく行なわれて来た。ダンテ『神曲』などにもその例がある。
- 2) « Le Christ aux Oliviers » dans *Les Chimères* 参照。
- 3) PL. I. p. 149.
- 4) PL. I. p. 150.
- 5) PL. I. p. 158.
- 6) PL. I. p. 151.
- 7) *Les Filles du Feu* 1954年1月、パリ、D. Giraud 書店より発売。収録作品 [Introduction (A Alexandre Dumas)/Angélique/Sylvie/Jemmy/Octavie/Isis/Corilla/Emilie. 巻末付録として *Les Chimères* [« El Desdichado » « Myrtho » « Horus » « Antéros » « Delfica » « Artemis » « Le Christ aux Oliviers » « Vers dorés ».]
- 8) PL. I. p. 158.
- 9) « Antéros » dans *Les Chimères*.
- 10) ライン河は又、狂気の精ローレイの棲む河でもある。 *Lorely* 参照。
- 11) Lettre à George Bell, 31 mai 1954.
- 12) « Antéros » dans *Les Chimères* 参照。

13) *Sylvie*.

14) PL. I. p. 248.

15) 通称「ボローニャの墓碑銘」と呼ばれる謎の碑文の一部。ネルヴァルは *Le Comte de Saint-Germain* 中にラテン語の全文を引用し、これにフランス語訳をつけている。PL. I. p. 557.

16) « Antéros » dans *Les Chimères* 唯一神エホヴァ

17) « Histoire de la Reine du Matin et de Soliman Prince des Génies » dans *Voyage en Orient*. PL. II. p. 555.

18) i.d.

19) この時の具体的な事情については、この物語では全く説明されていない。

20) *Octavie* に次のような記述がある。この部分は所謂「オーレリア書簡」からの引用である。PL. I pp. 287-288.

死ぬこと、ああ！なぜこの考えがいつも私の心に舞い戻ってくるのでしょうか。まるであなたが私に約束して下さった幸せに匹敵するものとしては死しかないともいうかのように。死！この言葉はしかし、私の心の中に陰鬱なものを注ぎこむようなことは全くないのです。死は、祝宴の終りの時のように、蒼白い薔薇の花の冠りをいただいて、私の前に姿を現わすのです。時折り夢に見たことなのですが、死は、幸福のあと、陶酔ののちに、憧れの女性の枕許でほほえみながら私を待っていて、次のように話しかけるのです。「さあ、若い人よ、おまえはこの世での悦びの割当てのすべてを手に入れてしまった。だから今は、来てお眠り、私の腕の中に来ておやすみ。この私はきれいなじゃない、でもやさしいし、人助けにはなる、それに悦びを与えはしないけれど、永遠の安らぎを与えることはできるのだよ」と。

21) PL. I. p. 387.

22) PL. I. p. 364.

23) PL. I. p. 385.

24) « Le Christ aux Oliviers » dans *Les Chimères*.

25) PL. I. p. 386.

26) PL. I. p. 386 « [...] il est bien difficile, dès que nous en sentons le besoin,

de reconstruire l'édifice mystique dont les innocents et les simples admettent dans leur cœurs la figure toute tracée. »

27) PL. I. p. 392.

28) PL. I. p. 393.

29) cf. « L'arbre de science n'est pas l'arbre de vie! » PL. I. p. 386.

30) « Madame et Souveraine » 1852年12月2日付と推定されるド・ソルム夫人宛の書簡中に記されていたと言われる詩。この詩のあとに « Epitaphe » という詩が添えられている。

31) PL. I. p. 398.

32) Marie-Jeanne Durry., *Gérard de Nerval et le Mythe*, Flammarion 1956 p. 76.

33) PL. I. p. 364.

34) « Delfica » dans *Les Chimères*.

35) PL. I. pp. 404–405.

36) 占星術によればネルヴァルは土星の強い影響力のもとに生まれたらしい。

Saturne は「土星」の他に「鉛」を表わし、錬金術では化金石の第一素材である。

又、^{★トウルヌス} Saturne の黄金時代の復帰がヴェルギリウスの牧歌第四歌にうたわれているが、ネルヴァルはこの詩の一部を « Delfica » のエピグラフとして引用していた（決定稿にはない）。

37) PL. I. p. 408.

38) PL. I. p. 407.

39) *Paradoxe et Vérité*, PL. I. p. 435.

40) Lettre au Dr. Emile Blanche, 27 novembre 1853, PL. I. p. 1098.

41) Lettre à George Bell, début décembre 1853, PL. I. p. 1106.

42) Lettre à George Bell, Strasbourg, 31 mai 1854, PL. I. p. 1129.

43) *Sur un Carnet*. PL. I. p. 432.

44) i.d.

45) Lettre au Dr. Emile Blanche, Francfort, 15 juillet 1854, PL. I. p. 1160.

46) Lettre à Franz Liszt, Passy-lès-Paris, 10 octobre 1854, PL. I. p. 1168.

尚文中の「作品」は *Aurélia* を指す。

47) Lettre à Arsène Houssaye, vers le 20 octobre 1854, PL. I. pp. 1174–1175.

48) Lettre à Antony Deschamps, 24 octobre 1854, PL. I. p. 1175.

49) *Sur un Carnet* PL. I. p. 434.

50) Lettre à M^{me} Labrunie, 24 janvier 1855 PL. I. p. 1186.

この手紙の日付の2日後の26日早朝、ネルヴァルは縊死体となって発見された。

51) « Epitaphe » 註30) 参照。

52) P. フィリップソン「神話の時間様式」 dans 『ギリシャ神話の時間論』(廣川洋一, 川村宣之訳) 東海大学出版会, 1979. 参照。

53) G. Poulet, *Trois Essais de Mythologie romantique*, Corti, 1966; p. 79.

54) E. M. Cioran, *La Chute dans le Temps*, Gallimard, 1978; p. 170.

ネルヴァルのテキストの引用は全て Nerval, *Oeuvres*, Texte établi, présenté et annoté par A. Béguin et Jean Richer, Bibliothèque de la Pléiade, Tome I (1966), Tome II (1970) により, PLの略号で示した。

尚訳文には筑摩書房のネルヴァル全集(全3巻)を用い, 本文の用語との関係で適宜手を加えた。